

スポーツにおけるアマチュアリズムの問題

永 井 康 宏

(1) アマチュアリズムとは何か

スポーツにおけるアマチュアリズムとは、文字通り、「アマチュア主義、アマチュア強調の主張」である。具体的に言えば「スポーツをするものは、アマチュアでなくてはならない」という主張、あるいは「スポーツはアマチュア精神に従ってするのがよい」という考え方の主張である。

したがって、アマチュアリズムとは何かを明にするためには、先づ、アマチュアとは何かを明かにすることが先決問題であろう。

アマチュア amateur はラテン語の amator に由来する英語である。そして amator とは、報酬で自分達の武勇を宣伝自負していた競技の選手達と区別して、古代オリンピア競技に出場した選手を敬慕する呼称⁽¹⁾であった。しかし、今日のアマチュアの概念は、このような古代ギリシャの精神を直接受けついでものではない。近代におけるアマチュアという言葉は、17世紀末から18世紀の初頭にかけて、フランスで、美術の鑑定にからんで用いられ、イギリスでは19世紀の初頭から、絵画や音楽などの芸術に関して用いられ、やがてスポーツ界に用いられるようになったのである。⁽²⁾それゆえ近代におけるアマチュアの概念は、イギリスにおける近代社会の発達の中で、近代スポーツが生まれ、発達し、大衆化してゆく過程で必然的に形成されたものであると考えられる。

そしてアマチュアがどのような内容を意味したかは、アマチュア資格や、アマチュアの定義を成文化したアマチュア規程によって知ることが出来るが、それは歴史的に変ってきている。

1866年、イギリス、アマチュア、アスレチック、クラブが最初の英国陸上競技選手権大会開催に際して採用、公表した世界最初のアマチュア規程は次のようである。⁽³⁾

次のものは、アマチュアではない。

(1) プロフェッショナルとともに賞金を目あてに、あるいは対抗して競技を行った者。

(2) いかなる方法によっても、生計を得るために、競技の練習を行うときにそれを教えたり、それを援助したことのある者。

(3) 職業、あるいは仕事としての職人、職工または労働者。

これをみると「プロと共に競技をしたり、プロまがいの金もうけのため、競技に関係したりした者」また「職人、職工、労働者」などはアマチュアとは認められていない。そして、このようなアマチュア観は、1878年決定した、パットニーにおける漕艇のアマチュア定義⁽⁴⁾にも、1879年ヘンレー競漕委員会が発表した規程⁽⁵⁾にも受けつがれている。

したがって、初期のアマチュアに対する考え方は極めて階級的、排他的であり、アマチュアは、上流階級のスポーツマンに限定され、しかも、アマチュアとは「ジェントル」(優雅で高尚でマナーを心得た)「マン」(人間)で、「紳士にふさわしい方法や態度で、スポーツをする者」と考えていたことがわかる。

しかしながら、同じイギリスでも専ら庶民階級の参加した、National Rowing Association や、Foot boll Association のアマチュア定義⁽⁶⁾には、このような階級性は見られない。「金銭を目的とせず専ら娯楽のために漕艇する者」がアマチュアであった。

アメリカでも1872年 National Association of Amateur Oarsmen of U. S. A. が「アマチュアとは単にスポーツのために漕ぐ人であり、プロフェッショナルとは基金の報酬を目あてに競技した人である」⁽⁷⁾と定義し、金銭との断絶を問題にしている。この定義の精神は、1879年 National Association of Amateur At-

hlete of America が制定した規程⁽⁸⁾にも受けつがれ、さらに、1890年 the Amateur Athlete Union of the U. S. A. が定めた規程⁽⁹⁾にも受けつがれている。アメリカにおける初期のアマチュアは、1860年ごろから現われていたセミ、プロフェッショナル、1868年に編成された職業野球 Cincinnati Red Stockings などから区別する必要から生まれた「ノンプロ選手」ということのであったのである。

その後、イギリスとアメリカでアマチュア定義や規程が成文化されたのに刺激されて、ヨーロッパ各国や英連邦各地で、アマチュア定義や規程ができるようになった。しかしその間の統一は殆んどなかった。けれども、近代オリンピック競技の復興を提唱したフランスのクーベルタン男爵やオリンピック委員を中心とする、世界各国各競技団体の意志統一への努力によって、(アマチュア規程の統一までにはならなかったけれども) 理念的には「アマチュアとは特別の愛情をもってはいるが、決してそれに専念しているのではない人」日本式に言えば「素人」という概念は確立された。そして現在では、アマチュアとは「現在においても過去においても、趣味、嗜好からスポーツに専念し、それによって何等の物質的利益を受けない者」⁽¹⁰⁾であるとされるにいたっている。

このようにアマチュア概念は、国によって異っていたし、また時代によってもその具体的規程は変遷して来ている。しかしそれにもかゝらず、アマチュアについて一貫している観方は、スポーツを職業としている者の否定、排除ということであり、それに類する行為を否定していることである。それゆえ、アマチュアリズムとは、スポーツマンの職業競技者化、あるいは職業競技者の行為否定主義と解することができる。

(2) 過去におけるアマチュアリズム

それでは、アマチュアリズムは一体何のために強調されてきたか。

イギリス初期のアマチュアリズムは、上流階級の余暇活動としてのスポーツの原初的性格維

持ということが中心になって強調されたものと見られる。

漕艇競技はイギリスでは古くから行われて居り、競技会には莫大な金額の賞金が賭けられていた。そして当時の習慣として、競漕中、艇を接触させて相手の進行を妨害することが行われ、イギリス最古の漕艇クラブ、リアンダークラブ Leander club (1815年から1820年の間に設立された)⁽¹¹⁾やその他のクラブでは、このような舵手の役や漕ぎ手に、職業者を備って、共に競技会に出場させたり、コーチを受けたりしていた。

一方、ジェントルマン養成の高等教育機関であった大学や、パブリックスクールにおいても、ボート漕ぎ、その他のスポーツが行われていた。すなわち19世紀初めから、クリケットが野外の遊びと共に大学生のレクリエーションとして行われ、ボクシングもジェントルマンにふさわしいものとして行われていた。⁽¹²⁾ フットボールは1873年までは行われなかったが、陸上競技、ラケット及びテニス⁽¹³⁾は1860年以前から大学対校競技の種目となっていた。⁽¹⁴⁾ ボート漕ぎは最初、ジェントルマン向きではないと考える人もあったようであるが、対校ボートレースはすでに、1815年には行われており、オックスフォードとケンブリッジの対校ボートレースは1829年に行われ、1838年以来年中行事として行われている。⁽¹⁵⁾ またパブリックスクールでも、19世紀の初めには、18世紀に貴族的な娯楽として取り上げられたクリケットが盛んに行われ、対校競技も行われていた。⁽¹⁶⁾

当時は、マッキントッシュによれば「現在盛んに行われているスポーツのうち、クリケットとゴルフだけが公認された規則のもとで組織され、行われていたに過ぎない。拳斗はある程度組織され、18世紀にブルトンがつくったルールが引続き用いられていた。陸上競技会はまだ徒歩競技会の程度だった。漕艇はまだボート漕ぎの域を出なかった。フットボールとホッケーはスキルというよりむしろ、力くらべの程度であったし、ローンテニスはまだ考案されていなかった。しかしボートレースは1825年から対校

競技が行われたし、フットボールもクリケットと同様、熱狂的に行われていた」⁶⁶のである。

パブリックスクールにおけるこれらのスポーツは、個々の教師からは是認されたり黙認されたりすることはあっても、学校当局からは、積極的に奨励されたわけではなく、生徒達が勝手にやっていたのであり、一般的にはむしろ敵意に満ちた態度を示されていた。特にフットボールは、学校外では、貴族にふさわしい娯楽ではないとして受入れられていなかったようである。しかし後、それらが組織化されるにつれ、教育の媒体として承認され、さらに1860年代には支配階級の教育にとって重要なものとして積極的に奨励されるようになってきている。

これらのスポーツにおいては、ジェントルマンとしての、あるいは支配階級としての性格陶冶ということが非常に強調され、その立場から教育としての重要性が認められていたのである。

例えば、1857年4月に出版されたヒューズの小説「トム・ブラウンの学校生活」では、パブリックスクールの教育が、戦場やイギリス帝国守備隊の勝利と意識的に関連づけられているが、そこではゲーム、特にチームゲームが、支配階級にとって価値のある性格の陶冶と資質発達に効果があることを認め、称賛している。

また、1861年につくられたクラレドン委員会は、パブリックスクールの教育を「イギリス人が最も誇りうる資質（他人を統禦し自己に打克つ能力、自由を秩序に結びつける能力、公共の精神、性格の力強さと男らしさ、世論を非常に尊重するがしかも簡単にそれに追随しない精神、健全なスポーツや運動を愛好することなど）の陶冶のための計り知れない手段である」として、パブリックスクールにおける組織的ゲームについて「クリケットやフットボールの競技場は、単なる運動や楽しみの場所ではなく、最も価値ある社会的資質や男性的美德の形成に役立つので、教室や寄宿舎と同様にパブリックスクールにおいて顕著で、かつ重要な位置を占める」⁶⁷と、その価値を認めている。

19世紀後半になると、これらのスポーツがパブリックスクール内に止まることなく、国内の大部分にひろまり、全国的協会のもとに組織され、パブリックスクールの卒業生たちが中心になって、競技規則をつくり方法を改良し、⁶⁸それがイギリススポーツの主流になった。（今日世界にみられるゲームやスポーツの多くはこのようなパブリックスクールの生徒や、卒業生の音頭によって発達したものである）⁶⁹

したがって、これらのスポーツがどのような性格のものであったかは、おのづから明らかであるが、ケンブリッジとオックスフォード両大学対校競漕において、ケンブリッジ大学が職業漕手を備って接触を企てた時、曾ってのケンブリッジ大学の名漕手イーガンが憤激して公開した手記⁷⁰を見るとさらに当時のスポーツの性格がよく理解される。イーガンは「自分は、自分（競技者）が愛好している漕技が自分（競技者）の愛の第一目的でなければならないといいたい。自分（競技者）が追求すべき一大目的、（競技の）主要な目的は、完全な漕技を現わすにある」といって、勝つことよりもよりよい技術の表現こそ競技（スポーツ）の目的でなければならぬと主張している。

この主張を支えるスポーツ観（「スポーツとは技を競い合って楽しむもの」という考え方）こそ、近代イギリススポーツの原初性格であったように思われる。そしてこの考え方はずっとつきつめていくと、スポーツは余暇活動でなければならぬという思想に一致すると思われる。なぜなら、スポーツが余暇活動として行われている限り、スポーツは本務に対して第二義的な意味をもつから、いかに専心して行なうとも、非現実性（本務とか現実生活とかと直接の関わり合いがない）や行動の自由性をもち、楽しみや遊びとしての性格を失わない。しかし、スポーツが職業となると、スポーツは即人生として最も現実的なものとなり、成功するためには、常に、勝たねばならなくなる。そうなるスポーツは、協力して技を競い合って楽しむということよりも、勝つために時には手段を選ばないという生活斗争になってしまうおそれが

あるからである。

ともあれ、イギリスの競漕あるいはスポーツは品位をもった紳士競技^⑧なのであったから、「漕艇のスタイルの品位を損し、あるいは完全な八擡艇の美と曲雅（優雅か？）とを害なう嫌いあるものは、容赦なく除去しかつ罰すべきである」^⑨と主張されるように、紳士競技としての品位を保つことは重要であった。それ故、たとえ出身大学が勝つことを希望して、「古来承認せられたる紳士競技の原則を無視し、単に利益に偏する他の制度を採用」^⑩しても、漕艇本来の立場からみれば、出身大学のためというのは単に第二義的な意味しかもたないから、「漕艇本来の高き立脚地に近きものに組みして」^⑪出身大学という「従属的繫縛」^⑫から脱すべきであったのである。また職業漕人Watermanを入れたことについても、ヒューズが、「策を得たるものとは言われぬ。余は漕艇が彼等の干渉によって多大の累を受けたと確信している。一層明言すれば八擡艇技は職業漕人の手によって著しく退歩した」^⑬あるいは、「クルーに求めたのは一層高尚な精神と、年々発達し来れる最上の美である」^⑭といて、単なる勝利主義と職業漕人の介入を排し、世人がこれに賛同して、それ以後漕艇のアマチュアリズムが発展したという事実は、初期のアマチュアリズムがスポーツや競技会の品位を保ち、スポーツの原初的性格を変えないための主張であったことを物語っている。

「労働者をアマチュアと認めない」^⑮という主張それ自体は、特権階級意識の強い排他的、独善的な主張に違いないのであるが、紳士競技ということに象徴される「競技そのものを楽しむ」という（スポーツの原初的性格を維持しようとする）上流階級の態度が、このような主張になったものと考えられる。

アマチュアリズムはこのような、いわば本質的な理由からだけでなく、もっと現実的な理由からも主張されているとみられる。

スポーツを職業としあるいは職業的に練習している者と、仕事の余暇に練習している者が同一次元で競技するのは極めて不合理である。

アマチュアリズムの強調は一面から言えば、競技におけるこのような不合理を排除し、平等な条件を保証するために古くから強調されたものとみられるのである。

その後のアマチュアリズムの強調は、イギリス初期のような競技会の品位を保つ、ということからではなく、スポーツによる人間教育という立場と、平等な条件の保証という立場からなされている。しかし原初的性格を維持しようとする態度は本質的には変わっていない。

オリンピック競技の創始者クーベルタン（1863—1937）は、スポーツによる国際親善、スポーツによる人間形成を考え、オリンピック復興を企図した。そして彼はスポーツにおけるアマチュアリズムを強調し、オリンピック競技にプロフェッショナリズムが介入することを排撃した。紛争で終始した第四回オリンピック大会終了の前夜、イギリス政府の晩餐会の席上において彼は、

「オリンピックで重要なことは勝利でなく、参加することである。人生の重要なことは成功ではなくて努力することである。大切なことは勝ったということではなく、よく戦ったということである……………」^⑯と述べてスポーツの価値は結果としての勝利にあるのではなく勝利を求めて練習する過程に、また、ベストをつくして試合する過程にあることを指摘し、結果としての勝利よりも、勝利を目標として努力すること、正々堂々と奮闘することを奨めている。

IOC第5代の会長ブランデーグ Brundage, A, は1952年9月第15回オリンピック大会終了後、各国NOCに送った書翰の中で、国家主義とオリンピック及びアマチュアの問題にふれ

「オリンピック競技は個人間の試合であり、世界の若人の楽しい祭典として計画されたものである。選手は最高の努力を尽し、できれば勝利を得、できなかつたら勝利者を祝福するのである。オリンピックは国家間の試合であってはならない。もしそうならば競技精神に反するのみならず、破滅に至るであろう……………戦前既にある国では、国家誇示の目的をもって、一流選手を国際競技の準備のために長

期に亘ってその仕事、あるいは勉強から離れさせた。また選手は兵士と同じく、自国の名誉を守るべきものであるから、兵士の如く国家の支持をうくべしとの意見さえ述べられた。これはもちろん、オリンピック及びアマチュア、スポーツの根本原理に全く反するものである。」⁸⁰

と述べ、また1958年5月東京で開催された第54次IOC総会での挨拶で、スポーツと芸術とを比べながらアマチュアとプロについて、

「アマチュアは自由で独立のものであるということである。職業選手が成功しようと思えば、常に勝たなければならない。而も料金を払う大衆の気に入るように演技し、且つ勝利を得なければならないのである。彼は有給の労働者であって自由な行動者ではない。営業的芸術家についても同様である。営業として成功するためには売れるようなものを作り、又は描かなければならない。これは彼自身の趣味に支配されるのではなく、買手の趣味に支配されるのである。真のアマチュアや真の芸術家はこのような要求に屈伏するものではない。大衆に盲従することを拒否する。彼は何にもまして特に、金銭に興味をもつような態度をとらない。彼の関心は質の向上にある。換言すれば、真の芸術品は売ることを主眼として作成されるものではないのである。……………」

所謂、プロスポーツも亦完全に正当なものである。しかしながら、それは決してスポーツでないことを忘れてはならない。それは商売であり、興行部門に属すべきものである。プロスポーツは観衆を必要とするが、アマチュアスポーツは先ず第一に、参加者のためのものであって、むしろ観衆をスタンドから競技場に引張り出すものである。」⁸¹

とアマチュア及びスポーツの本質について述べている。

日本体育協会のアマチュア規程（昭和32年12月4日改訂）には次のような前文がある。

「アマチュアスポーツはこれを愛好するが為に行なわれる。従ってスポーツが他の目的の

ために、例えば特に金銭的、名聲的、広告的等の目的のために利用されたり、見せ物になったりすることはアマチュアスポーツの本質に違背する。」⁸²

これらの主張は皆、スポーツを人間教育（体育）たらしめんとする主張に他ならない。そしてスポーツを人間教育に資するためには、スポーツの原初的性格を維持しなければならないことがそこでまた主張されている。

アマチュア規程は、クーベルタンが1894年アマチュア資格についての世界各国の意志統一を考え、「アマチュア問題の疑義についての研究会」を招集した程、世界各国各種目別統制団体ごとにもちまちまであった。そしてそこではオリンピック競技の復興は決議されたが、規程の解釈についての一致は見ることができなかった。⁸³そしてその後、アマチュア規程の条項は増加され、条文の解釈を巡って論争が行われたが、スポーツの普及によるスポーツ人口の増加とそれに伴う各種競技会の激増から、アマチュア規程はしばしば改訂せざるを得なくなった。結果的にはクーベルタンが

「きわめてわずかな金銭をとったという理由で、この崇高な（スポーツ精神的）感じに浴することを拒否するということは、私からみると、いさか子供らしいように思われる。もちろん、プロフェッショナルとアマチュアとのあいだに、ある一線を画することは必要であろうが、これがために角を矯めて牛を殺す結果をおそれたのであった」「要するに、すべてはプロレタリア階級に対する宜戦であり、また特殊階級のひとりよがりとも見られる」⁸⁴と批判し、「この時から私はアマチュア問題について、まったく興味を失ってしまった」⁸⁵

と嘆くほど厳格な条文が附加される傾向にあった。一方、アメリカでは規程の条文の増加と否定的な表現に反撥し、アマチュアとは何かを積極的に表現しようとの努力がなされ、アマチュア規程はしだいにその方向を辿るようになった。

このような規程の変遷は数多くあったが、ア

マチュアリズムは平等な競技条件の保証とスポーツの原初性格維持のために、いろいろな社会状況下でくりかえし強調されて来たのである。

そして時には、その主張の階級性の故にスポーツの大衆化を阻害し、時には職業化の否定排除の主張のゆえにスポーツ文化の向上発達を妨げたこともあった。しかし、そのようなマイナスの点があったにしても、アマチュアリズムがスポーツの変質を防ぎ、スポーツマンのプロ化を何等かの程度防いできたことは事実である。

(3) 現在におけるアマチュアリズムの必要性とその限界

近代スポーツの多くは、当時最も資本主義の成長の著しかったイギリスに、上流階級、資本家階級の教養、娯楽にふさわしい活動として発生し、発達した。

そしてそれは、各国の資本主義の成長とともに世界各国に普及していった。オリンピック大会や国際競技会が成立すると、それを中核として急速に発展していった。

資本主義の発達によって生まれた労働者階級は、初期には目をおろうような非人間的な生活状態で、生きるのが精一杯でスポーツどころではなかった。しかし生産性の向上と労働者自身の絶えない努力によって、しだいに経済的余裕と自由時間をもつことができるようになった。そうなるとホモ・ルーデンス^②と言われるように自由、幸福、生き甲斐を求める人間として、労働者もスポーツを求め出し、スポーツはしだいに労働者階級の間にも普及していくようになった。そして大衆化した。

一方、スポーツがオリンピック大会などを中核として発展し、各国内でも大衆化し発展するにつれてプロスポーツが発生した。プロスポーツとは資本家が企業として商業ベースにのせたスポーツのことであり、プロスポーツの発生は資本主義社会では必然的なことであるが、一旦発生すると逆にスポーツの大衆化や発展に影響を与えるようになった。そして現在では、かつて上流階級の余暇活動、と言ったスポーツの原

初性格はしだいに失われ始め、スポーツは、勝敗を重視する職業的性格を帯びた人間活動の一種に変わってきたある様相を示している。

このようなスポーツの変質を防止するものとして登場したアマチュアリズムは、このようなスポーツの動向に対しては一体どのような意味をもつであろうか。最早過去のもので役に立たないのか、それとも尚必要なものなのか、あるいは不必要なものなのか。これを究明するためには先づ、今日のスポーツ状況と、それを呈するに至った要因や理由を分析する必要がある。

今日のスポーツの状況を全体的にとらえると次の「図1」のように表現できる。すなわち、今日のスポーツ活動は、実際にスポーツを行う者を中心に、スポーツを愛好する者。スポーツを指導し運営し方向づける者、スポーツについての情報を流す者、さらにスポーツをめぐる国際情勢など、いろいろな要因の複雑なからみあいの上に行われている。したがって、そのどの一つを抜きにしても、スポーツの正しい相をとらえることは出来ない状況になっている。そしてこれらの要因は、スポーツ文化の性格や社会

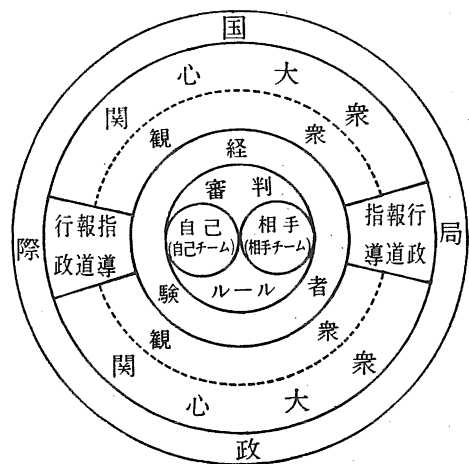


図1 現在におけるスポーツ状況の分析

体制と密接な関係があり、そこに今日のアマチュアリズムの問題点が潜んでいるように思われる。以下それらについて述べて見たい。

今日のスポーツは曾っての上流支配階級の娯

楽として発達したものである。それゆえ大衆化の過程において、多少変化はしたが、なお、競技方法、マナーには勿論、服装、施設用具などにも上流階級の意識や生活を反映したものが残っており、大規模な施設や金のかゝる用具、服装を要するものが多い。

また、競技であるから、大体同程度の技能をもつプレーメートが必要である。特にチームゲームの場合には一定数のプレーメートが揃わなければならない。

さらに、ルールが複雑化し、技術が高い水準になると指導者が必要になるし競技会出場や遠征、合宿等へ参加するとかなりの経費を要する。

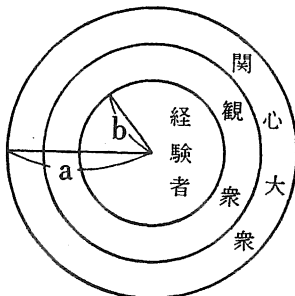
したがって、このようなスポーツを行うためには、少なくとも余暇時間、経済的余裕、スポーツ施設用具の三つの条件が揃わなければならない。特に施設用具は絶対的な条件となる。けれども、大規模なスポーツ施設、多額な経費を要する用具などは、個々人が準備するには余りにも負担がかゝり過ぎて、一般的には無理である。

現代のスポーツ文化はこのような性格をもっている。そしてこのような文化の性格の中に、既にアマチュアリズムの問題点の一半がひそんでいる。

次に社会体制との問題であるが、スポーツの大衆化と社会体制との関係を、先にあげたスポーツを行うために必要な三条件との関係から検討してみよう。

現在では、コミュニケーションの発達によ

(図2)



て、体制のいかんを問わず、スポーツが普及し

大衆化したことは事実であろう。普及あるいは大衆化の状況を図式で示すと、一般的にはスポーツ経験者集団(実施人口を含む)を中核円とし、これを取巻く同心円に観衆層(積極的愛好者集団)、さらにこれを巻取く同心円に関心大衆者層(消極的愛好者集団)の3つの同心円として現わすことができる。(図2)

具体的にはスポーツ人口調査によらなければならないし、その結果は同心円の半径の長さにいろいろな違いがでてくるであろう。しかし3つの円の相互関係(各集団の人口の順位の関係)はこの場合が最も多いのではないかと推定する。普及度は人口との関係から示される各円の半径の大小によって知ることができる。

この図において、スポーツ未経験愛好者円(観衆層+関心大衆層)の半径 a と、経験者円の半径 b との関係、 $a-b$ の差がより小さい方が望ましい大衆化の状況であり、($a-b=0$ or $a < b$)は理想的であるが現実には存在しないだろう)差が極端に多い場合は「いびつな大衆化」の状況と言えよう。

スポーツの正しい大衆化は、余暇時間、経済的余裕、スポーツ施設用具の三つの条件の整備を前提として、欲求に対する刺激と、スポーツに対する正しい認識の育成とが平行して行われて初めて、可能となるのである。

社会主義体制の国では、スポーツが、国防力や生産力増大のための国民の全面的な身体発達の方法として取上げられ、国家が施設を整備し全国民に奨励指導する。優秀なスポーツマンは国家が援助したり、文化功労者として表彰したりするよう制度化されている。⁹⁾ それゆえこゝではスポーツが即体育として行われ、しかも全国民が行える態勢になっている。スポーツの大衆化のための態勢としては、一応望ましい態勢であるといえよう。

これに対して資本主義体制の国では、自由競争によって優者が勝ち、敗者が敗れるのは当然であり、優者がよい位置を占めるのは当然であるとする。したがって、余暇時間にしても、所得にしても格差を生じるが、¹⁰⁾ スポーツに関し

でも、極端に言えば、金と暇に恵まれた者だけが享受して、享受したくても施設や用具、時間や金のない人達はスポーツから疎外されてしまう態勢にある。

資本主義社会ではスポーツが発達し、一般国民生活の意識の中に入ってくると、資本家は企業として商業ベースにのせ（これは避けることが出来ない）、そのようななかからプロスポーツが発生し、さらにスポーツを利用する産業が発達する。現在、プロスポーツを含めて、商業ベースにのっているスポーツ関係のもの（スポーツ産業といわれる）には次のようなものがある。⁽⁴⁾

第一次産業部門 競争馬の生産

第二次産業部門 スポーツ用具、スポーツウェアの製造

第三次産業部門 球団経営、運動場（場所）

貸しや貸運動具（ゴルフ、モーターボート自動車、ボーリング、スキー、スケート、プール、釣）プロスポーツ、ギャンブルスポーツの興業（競馬、競輪、プロレス、プロボクシング、プロ野球、大相撲）スポーツマスコミュニケーション（ラヂオ、テレビ、新聞、週刊紙など）

それで、スポーツ欲求があっても、あるいは欲求を刺激されても、それを充す条件が整わない者は、このような商業施設を利用したり、他人のするのを観ることや、テレビによる、プロやアマのスポーツの視聴、ラヂオによる放送の聴取、スポーツ新聞あるいは新聞のスポーツ記事、週刊紙の購読などで代償的に充たしたりする。このようにして、未経験の、あるいはスポーツ経験の浅い多くのスポーツ愛好者が生まれる。

一方、プロスポーツの世界では優勝者が莫大な賞金や、賞品を与えられたり、社会的に有利な地位につくことがあっても当然と考えられている。そしてジャーナリズムはこれを華々しく報道して国民的な英雄にまでまつり上げる。商業主義のジャーナリズムは、アマチュアスポーツをもそのように報道して販路の維持拡張を計る傾向が強い。

アマチュアスポーツの場（施設用具）は主として企業体と学校にあり、そこから運動クラブが生まれている。企業体におけるスポーツは、従業員の強健な身体を育成することによって、労働生産性を高めるために奨励される。しかしこのような状況の中で資本家や企業体はスポーツを広告宣伝政策、「行き過ぎた組合活動家で企業が困っている状態の中で、スポーツマンだけは偏った思想や非常識な行動をしない」⁽⁵⁾という意味での組合対策、また、人間的配慮を感じさせ、恩恵を感じさせて人間関係の円滑化を図る人事管理の政策などに利用する。そのため施設が少数の運動クラブに独占され、多くのスポーツ愛好者はスポーツから疎外される。一方スポーツマンはセミプロ化し、人間疎外に陥れられる傾向にある。

学校スポーツも、ジャーナリズムやプロスポーツの影響を受け、運動のクラブがプロスポーツや企業体クラブの選手源、学校の名譽、宣伝の荷負手となり、技能のすぐれた少数の者が、あまり多くない学校の施設を独占してセミプロ化し、欲求はもつが技能的に劣る大多数の者は疎外されるという形になり易い。

資本主義体制ではこのように、大衆化がいびつになり易い。そしていびつな大衆化はスポーツの性格をしだいに変えていく。それは次のような機構による。

プロスポーツの隆盛、商業ジャーナリズムの態度、未経験あるいは、経験の浅いスポーツ愛好者の増大、これらが互に影響しあって、プロスポーツに対する観方や評価のし方がアマスポーツにも適用されるようになってくる。

スポーツマンの行動や態度は、観衆やスポーツファンの期待や要求からしらずしらずのうちに影響を受ける。

観衆やファンがファインプレーやフェアプレーを要求したり賞讃したりする雰囲気の中では、全力をつくしてそれに応えようとするし、高度な技術や勝利を期待する場合にはそれに応えようとして真剣に努力する。また逆に、アンフェアな行為をしても勝つことを求める場合には、特に、主体性を確立していない若いスポー

ツマンや無節操なスポーツマンは、そのような要求に応えるアンフェアな行動をしかねない。

それ故、観衆やファンがアマチュアスポーツとプロスポーツとを同次元において見たり評価したり、またアマチュアに、プロに対すると同じような期待や要求をもったりすることは、アマチュアスポーツマンを次第にセミプロ化あるいはプロ化することになる。一般に、スポーツ活動をかなり経験したことのある者は、自分の経験に照してスポーツマンやスポーツを観、評価することが多いが、未経験または経験に乏しい者は結果としての勝敗、記録、技術のみを観、評価することが多い。スポーツに何を期待し、スポーツマンをどのように評価するかについては大きく分けて二つの立場がある。一つはスポーツに勝利、技術、記録の向上のみを期待し、スポーツマンを彼の競技やその結果としての勝敗、技術、記録など、要するにスポーツ成績のみにもとづいて評価する立場であり、他の一つはスポーツに、スポーツによる人間形成（結果としての技術記録の向上と、それに至る過程における人間形成を含めた）を期待し、スポーツマンをその人間形成的な過程をも含めて、技術や記録を評価する立場である。前者はスポーツ文化至上主義的立場、勝利主義的立場であり、後者はアマチュアスポーツ的立場、あるいは体育的立場である。スポーツ経験者の中には、スポーツ文化至上主義的立場に立つ人も多いから経験者必ずしも体育的立場とは言えないが、概して自己の経験から体育的立場に立つ人が多い。しかし経験者の大多数が体育的立場であるとしても、未経験愛好者がそれよりもずっと多い場合には、たとえ、未経験愛好者の中かなり多数の体育的立場に立つ人がいるとしても、全体としては問題にならないほど、スポーツ文化至上主義、あるいは勝利第一主義的立場の人が多くことになる。言いかえれば、経験者層から、観衆層、閑衆層と周辺に行くに従って、体育的立場に立つ人が少なくなり、逆に勝利主義に立つ人が多くなるというのが一般的な傾向であるだろう。資本主義社会においては、このような未経験愛好者が極端に多くなることはスポー

ツの性格が変わるということに通じるのである。

それゆえ、アマチュアリズムの本質がスポーツの質を変えないということにあるとすれば、アマチュアリズムは資本主義体制の社会においてのみ必要なものであるといわなければならないだろう。歴史的にみても、アマチュアリズムは資本主義社会におけるスポーツの大衆化に伴うスポーツの変質とスポーツマンのプロ化を防ぐために存在し強調されてきたのであるから。それではこのようなアマチュアリズムが現在でも必要であるとするのならなぜ必要であるのか。それは、一つはスポーツマンの人間疎外を防止するためである。そして今一つは多くの人がスポーツから疎外されることを防ぐためである。

今日の資本主義社会のスポーツを支えているものをみると、商業主義、スポーツ文化至上主義、国家主義などが非常に強く表面に出ている。商業主義は一見、スポーツに関する知識や情報、運動施設を提供したりするので、スポーツの大衆化や発達に貢献するように見える。そして確に何等かの貢献をしているのも事実である。プロスポーツはスポーツ技術の向上や娯楽に、他のスポーツ産業もそれぞれの立場で役に立っている。しかしながら商業主義は結果的には利潤の追求を第一義に考えるので、スポーツの変質や個々の人間の幸福などは殆どあるいは第二義的にしか考えない。企業体のスポーツもそれがコマーシャルベースにのらなくなると直ちに中止させられてしまう。宣伝価値のない一般従業員のための施設などは積極的には考えられない。「アマチュアの資格をもちながらプロ選手に近い生活をしないとハイレベルを保つことが出来ない」⁽⁴⁾ 立場にあるスポーツ選手も広告宣伝や組合対策などの役に立つ間は貴族の様に待遇されるが、一度び役に立たなくなれば、「試合のため会社に出られなかった日は、欠勤と同じように勤務評定され」⁽⁵⁾ 放り出されてしまいかねない。しかし彼等は「組合からは特権視され、自分達の労働条件や権利を守り、不当な扱いに公然と斗かえない弱身をもっている」⁽⁶⁾ のである。したがって商業主義は究極的に

は、多くの人々のスポーツに対する要求を、いびつな形で（観る、聴く、読むなど）満足させることで解消して、スポーツに対する正当な権利の要求を退け、スポーツから疎外したりスポーツマンを人間疎外したりする結果になる。

スポーツ文化至上主義は、スポーツの技術や記録の向上発展を至上目的とし、どのような犠牲をはらっても、技術を高め記録を向上させるために努力する態度を尊いとする。そしてそれが即体育であると主張する。

このような態度がスポーツ文化自体の発達に貢献することは事実である。しかしながらこの立場はスポーツ以外は考えない立場である。またスポーツ文化に関する限りではプロもアマも区別しない観方をし、またそのように高度なものを要求する立場である。

しかしこのようなものの考え方は、経済的基盤が確立し余暇も充分ある人々のみに可能であろう。いわば19世紀イギリス支配階級と同じ立場に立つ主張である。たしかに、スポーツの最高記録や最高技術そのものの文化的価値は極めて高い。しかし、今日の多くのスポーツマンの中には経済的に恵まれない者も多岐にわたりました、スポーツの記録や技術そのものの水準も、とうてい余暇活動の程度ではついていけないほど高くなっている。したがってこのような考え方が適用できるのは極めて恵まれた素質をもつ少数の人々のみに対してであろう。現状で、一般にこのような考え方、立場を適用したり強調したりすることは、スポーツマンのセミプロ化、プロ化への道を奨励することになり、逆にスポーツマンを人間疎外に陥れたり、多くのスポーツ愛好者をスポーツから疎外することになろう。特に学生の場合には本務の学業がおろそかになると共に、悪いエリート化現象が生まれ誤ったクラブ愛、母校愛、祖国愛の傾向が生まれることになろう。

国家主義はスポーツを国防力、生産力の増強に利用したり、国威発揚の材料とみたりする。したがって、ナショナリズムがスポーツの大衆化や発達に貢献することは事実である。しかし極端なナショナリズムは、スポーツの質をかえ

スポーツエリートを育成することによって多くの人々をスポーツから疎外したり、スポーツによる人間性の開発を阻害したりする結果を生じ易い。

このように今日のスポーツを支えているものは皆、スポーツの質を変え、多くの人をスポーツから疎外し、またスポーツマンを人間疎外に陥れる性格のものばかりである。

それゆえ、多くの人のスポーツ要求を充たしスポーツマンにスポーツによる人間性の陶冶を完うさせるためには、どうしてもこれらと対決し、これらの主張にブレーキをかけ修正するものがなければならない。それがアマチュアリズムであるのだ。

アマチュアリズムは商業主義に対しては人間主義である。金や物より人間を第一義に考える。自分を大切に、自由、独立な立場を尊重し、技術を売らないことを強調する。

次にスポーツ文化至上主義の立場に対しては体育的立場である。スポーツをスポーツ文化だけのためでなく、行う者自体の身体的精神的社会的な成長のために行うことを強調し、本務や学業とのバランスを保つことを強調する。

さらに国家主義的立場に対しては国際主義、人道主義、平和主義の立場を強調する。

これらは皆、バイエラツールが「アマチュアリズムは精神の問題であって、法則上の問題ではない」⁴⁴⁾といったように、外から強制されたり、しばられたりする問題でなく、個々人の自覚の問題であり、主体性の確立の問題である。

しかしそれゆえに、そこにアマチュアリズムのもろさもある。人間の行動はすべて環境との適応の問題である。環境条件を全く無視した単なるアマチュアリズムの強調は、孤高を保って餓死せよというに等しい。人間誰しも先づ置かれた環境で生きることを最も先に考えるであろう。そして次に正邪善悪の価値判断を加えていこう。それと同じように強いスポーツ欲求をもっていればいるほど、それが容易に満されない状況下では先づ、ことの善悪よりも欲求を満すことを考える。その際にはアマチュアリズムは無力である。したがって、総てを環境に帰

するつもりは毛頭ないが、スポーツマンの主体性の確立を強調することと同時に、環境の改善をも併せ考えないと、アマチュアリズムの普及徹底は不可能であろう。

現在の日本のスポーツの状況をみると、東京オリンピックに好成績を獲得したいという国民感情が強く、それに基づく国家のオリンピック選手強化援助のかげで、地方自治体では国体選手の強化が、学校では対外試合選手の強化が盛に行われつつある。そのこと自体は決して悪くはない。しかし、スポーツと体育の概念が混同され、「スポーツを一生懸命やっておれば、あるいはやらしておけば教育効果が出る」とか「スポーツを一生懸命やるのが、あるいはやらせることが体育熱心なのだ」といった迷信的な態度が、直接当事者に見られ、行政指導もまたこのようなスポーツ文化至上主義の立場を支持助長する立場で行われていることは問題であろう。スポーツ選手達は各種目の水準がかなり高いので、愛国、愛県、愛校、愛社、スポーツ文化の水準向上などの大義名分のもとに、学生なら学業をスポイルしても、また社会人なら仕事を軽減してもらって励んでもよいような社会的ムードにあり、また励まねばならないような社会的ムードにある。種目やクラブによってはセミプロ化が当然のように認められ、また選手はスポーツをするためにはセミプロ化せざるを得ないような状況に陥れられている。

このような状況下で、個々人がアマチュアリズムに徹した行動をとることは容易ではないであろう。自己のアマチュアリズム尊重の所信を通せば場合によってはクラブからもスポーツからも疎外されかねない。したがって個人個人の主体性を確立する（アマチュアリズムを育てる）ことを計るとともに、その環境の改善への努力も同時に行われなければならない。それでないで現在の状況下ではアマチュアリズムは空念仏化してしまう懸念がある。そこにアマチュアリズムの限界がある。

アマチュア規定の個々の条項は、アマチュアリズムの本質と現代の状況とから考えて本質を損ねないように変更されるのなら差支えないで

あろう。しかし、多数の人がスポーツから与えられる恩恵を享受し、しかもスポーツの害を被むらないために、スポーツの原初性格の維持職業化否定ということは絶対に守らなければならない。すなわちアマチュアリズムは絶対必要なのである。

アマチュアリズムを確立するためには単にスポーツの世界だけで問題にしてもいて解決にはならない。政治が必要であり、政策が必要である。オリンピック競技を控えて、資本主義体制内部の矛盾に対する策とし生まれたアマチュア規程を、そのまま、思想も体制も異なる社会主義体制の国にまで強制適用させようとするのはおかしいように思われる。別の立場から再検討する必要がある。また、オリンピックでアマチュアリズムが適用できないから、国内でもアマチュアリズムは不要だと言うのもおかしい。今の段階では国内のこととオリンピックとは別個に考えた方がよいように思われる。極く限られた少数の人々のためにアマチュアリズムが無視されて、多くのスポーツ愛好者がしめ出され、また残るものも恩恵を受くべきスポーツから逆に害を受けるような事態になっては問題である。

今のような状態がつづく限り、機械化、オートメ化が進むにつれてスポーツは極く一部の限られた人の労働となり、見世物と変って、大多数の国民は、人間対人間の競争であるスポーツを忌避して、見物するに止まり、それから逃避して自然の中に安らぎを求めようになるのではあるまいか。スポーツ文化を愛するのにその高さの高きのみを求めて底辺を拡大する努力を怠る時は、スポーツそのものの存在をもかえって危なくすることになりかねないだろう。アマチュアリズムの強調とスポーツ環境の改善が切に望まれるのである。そしてアマチュアリズムを維持するためには次のようなことが必要であろう。

①スポーツマンの主体性の確立

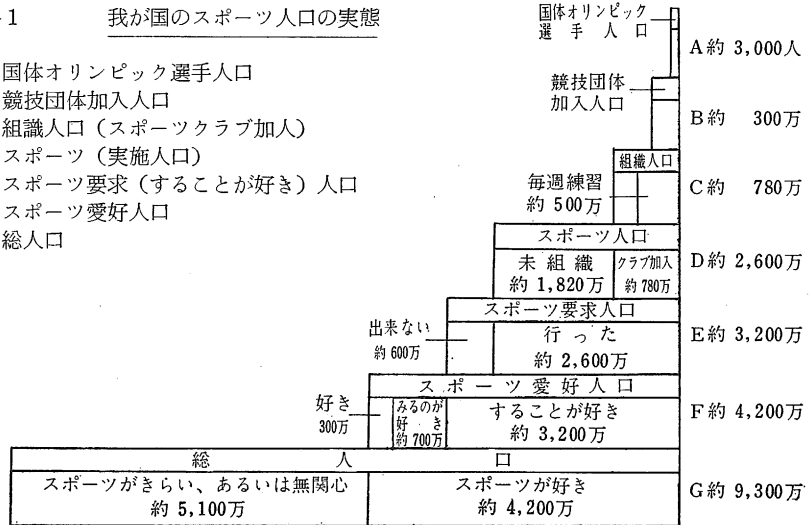
本務とのバランスをとりつつ、自由、独立な人間としての立場でスポーツを行う主体性を確立する。そしてそれを組織してゆく。

スポーツにおけるアマチュアリズムの問題

- ②正しいスポーツの大衆化のための施策による環境の改善
- ④余暇時間の増大 { 社会福祉の向上 }
 ⑤生活基盤の確立
- ⊕スポーツ施設の増設 (小規模のものを多く)
 ⊖スポーツに対する正しい認識を高める。
- 以上

資料1 我が国のスポーツ人口の実態

- A 国体オリンピック選手人口
 B 競技団体加入人口
 C 組織人口 (スポーツクラブ加入)
 D スポーツ (実施人口)
 E スポーツ要求 (することが好き) 人口
 F スポーツ愛好人口
 G 総人口



(昭和33年調べ)

資料2 労働時間、賃金等国際比較

	労働時間 (週平均)	時間賃金	
		賃金額	日本を100として
アメリカ	40.3	799	985
イギリス	46.1	312	385
フランス	44.9	144	178
西ドイツ	45.8	209	258
イタリア		126	156
日本	50.5	81	100

製造業平均 (国際統計要覧60)

1,959 (堀江正規日本の労働者より)

主要国週間労働時間表

	アメリカ	イギリス	西ドイツ	フランス	日本
1,955	40.7	46.4	48.8	44.7	48.4
1,956	40.4	46.0	47.8	45.4	50.2
1,957	39.2	45.3	45.5	45.1	50.2
1,958	40.3	46.1	—	44.8	50.5

(文部省編日本スポーツの現状より)

資料3

スポーツへの直接参与

直接参与		運動した(%)	しなかった(%)
性別			
男		44.3	55.7
女		21.9	78.1
計		33.1	66.9

スポーツへの直接参与の程度

直接参与 性別	運動した程度(%)			
	たびたび	ときたま	できた かった	しな かた
男	13.4	30.8	13.4	42.3
女	3.5	18.4	14.1	64.0
計	85	24.6	13.7	53.2

職業別スポーツ直接参与

		運動した程度(%)			
		た び た び	と き た ま	で か き つ な た	し つ な か た
専門管理	男女計	21.6	45.2	9.6	23.6
	男	17.5	38.3	17.5	26.7
	女	19.5	41.7	13.6	25.2
事務的	男女計	23.1	42.5	18.5	15.9
	男	13.3	40.0	17.0	29.7
	女	18.2	41.3	17.7	22.8
販売的	男女計	16.2	31.2	12.4	40.2
	男	2.0	18.7	21.0	58.3
	女	9.1	24.9	16.7	49.3
労務的	男女計	12.4	32.5	15.4	39.7
	男	4.8	17.3	17.9	60.0
	女	8.6	24.9	16.7	49.8
農林業	男女計	1.7	14.8	6.8	76.7
	男	0	8.7	6.3	85.0
	女	0.9	11.7	6.5	80.9
無職その他	男女計	8.1	21.5	5.9	73.5
	男	2.2	15.2	12.3	70.3
	女	5.2	13.8	9.1	71.9

産業別・産業規模別スポーツ直接参与

産 業			運動した程度(%)			
			た び た び	と き た ま	で か き つ な た	し つ な か た
第一 次	第一次	男女計	4.5 0 2.3	17.0 8.4 12.7	6.8 6.3 6.5	71.8 85.3 78.5
		20人以下	男女計	8.7 0.8 4.8	35.9 20.8 28.3	14.7 10.8 12.7
第 二 次	30~99	男女計	15.4 0 7.7	33.3 26.1 29.7	16.0 19.2 17.6	35.3 54.7 45.0
		100~299	男女計	25.3 11.1 18.2	21.2 16.7 18.9	15.0 22.5 18.8
二 次	300~999	男女計	27.0 9.5 18.3	30.9 21.4 26.1	17.2 4.8 11.0	24.9 64.3 44.6
		1,000 以上	男女計	22.0 9.4 15.7	43.5 32.0 37.8	6.1 29.3 17.7
第 三 次	第二次計	男女計	16.1 3.9 10.0	34.1 22.8 28.5	14.5 16.3 15.4	35.3 57.0 46.1
		29人以下	男女計	13.7 5.3 9.5	31.3 20.4 25.9	16.5 19.3 17.9
三 次	30~99	男女計	18.8 8.2 13.5	42.0 33.3 37.7	12.5 17.1 14.8	26.7 41.3 34.0
		100以上	男女計	21.0 16.5 18.8	44.0 40.4 42.2	15.1 21.4 18.2
第 三 次 計	第三次計	男女計	16.2 7.7 11.9	36.0 24.2 30.1	15.5 19.0 17.3	32.3 49.1 40.7

大館市・東京都・倉敷市を対象とする調査(昭和38年) 資料「スポーツ人口の構造と変動」

引用ならびに参考文献

- (1)(3)(5)(6)(7)(8)(23)(29)(33)(34)(35) 井上春雄 アマチュアリズム 逍遙書院
- (2) 加藤橘夫 スポーツにおけるアマチュアリズムの必要性, 体育の科学1962.6
- (4)(11)(20)(21)(22)(23)(24)(25)(26)(27)(44) 加藤橘夫 スポーツの社会学. 世界書院
- (9) Encyclopedia Britanica1
- (10) 日本オリンピック委員会, オリンピック憲章, 日本オリンピック委員会
- (12)(13)(14)(15)(16)(17)(18)(91) P.C.マッキントッシュ 近代イギリス体育史 ベースボールマガジン社
- (30)(31) 日本体育学会, 保健体育講座V 体育の科学社
- (32) 文部省 日本スポーツの現状 教育図書
- (36) ヨハン・ホイジンガ ホモ・ルーデンス 中央公論社
- (37) 今村嘉雄 } ソ連の体育とスポーツ 大修館
富山 清 }
- (38) 長州一二 日本経済入門 光文社
- (39) 三辺光夫 日本のスポーツ 三一書房
生活科学社 スポーツの科学 医歯薬出版
- (40)(41)(42)(64) 三辺光夫 日本のスポーツ 三一書房
丹下保夫 体育技術と運動文化 明治図書
ヒューズ (前川俊一訳) 「トム・ブラウンの学校生活」
鈴木良徳 ブロークンタイムペイントについて }
富山 清 アマチュアリズムとソ連のスポーツ }
前川峯雄 スポーツマンシップ以前の問題 }
体育の科学社1962,6
- 加藤橘夫 オリンピックムーブメントの向かうべき道 体育の科学1964.8
- 竹之下休蔵 選手強化とスポーツの普及
//
- Pene Maheu オリンピックとアマチュア精神
//
- 竹之下休蔵 } スポーツ人口に見られる地域格差
菅原 礼 }
東京教育大学体育部紀要 昭和38,3